

『誰かの当たり前を支える』

練馬区立豊溪中学校 二学年 鈴木 里菜

私たちは普段、当たり前のように学校へ通い、授業や部活動に打ち込む日々を送っています。なんの変哲もない日常に思えますが、それを実現させるための基盤となっているのは、税金です。「税」と聞くと、どうしても難しいイメージをもつ人が多いと思います。ですが、「税」について考える機会が少ないだけで、私たちの身のまわりにはたくさん税金が使われているのです。

税金の中でも、教育に使われているものが私たち中学生にとって一番身近な税金だと言えます。公立小・中学校の場合には、学校の校舎・体育館・プールの建築、教室の机や椅子、教科書、授業で使う楽器やパソコン、黒板、理科の実験器具、体育用具など、様々なものに税金が使われています。また、教育を社会全体で支えるために、国や地方自治体が税金から支出する公費負担額は、東京都公立学校の児童・生徒の場合、小学生一人あたり約百万円、中学生一人あたり約百三十万円に上ります。

では、もしも税金がなかったら、私たちの日常はどのように変化するでしょうか。安心して学習に取り組める環境をつくるための費用をまかなえなくなり、その費用を学生の家族など、一部の人で負担しなくてはいけないため、大変重い負担になってしまいます。そのような事態が起きると、学ぶことができず子供は限定されてしまうと考えられます。子供の頃に十分な教育を受けられなかった大人が社会を牽引していくのは難しいでしょう。

国民の中には、「日本政府は税金を取りすぎだ」と強く非難する人がいます。けれど、その考えは正しいでしょうか。私は大きく間違っていると思います。たしかに、納めなければならぬ税金が少なければ少ないほど、メリットがあるのではと考えてしまいがちです。しかし、納めた税金は日本の未来を担う子供たちにも使われます。納税は未来を見据えた意味合いを強くもっていると考える人が増えることにより、納税について前向き

な捉え方がたくさんの人に広まるのではないかと思います。

教育に関する税の使い方は、日本で生活している人ならば、ほとんどの人がその恩恵を受けているものです。学ぼうとする意志を尊重し、支援してもらえることはとてもありがたいことだと心から思います。整った環境で学習できるのは、日本の税制度があるからこそのことだと、改めて感じる事ができました。私は将来、社会人としてお金を稼ぐ身となったら、子供たちの未来のために税金を納めたいです。私がたくさん大人の元にそうしてもらったように、子供たちにとって当たり前だと思える日常を支えていける大人になりたいと思います。